

中 里 理 子

要 旨

逆接確定条件の接続助詞の中から「が（けれど）／のに／ものの／ても／ながら」を取り上げ、用法の一部の比較・整理を試みた。これまで進められてきた研究を参考にして、条件づけが必要か、条件づけのない対比（対立的事柄と並列的事柄）が表せるか、の二点を中心にある共通した例文を設定して比較し、さらに時間的展開を考えた場合や主節のモダリティー制限、発話意図についても簡単にまとめた。「のに」と「ながら」は条件づけを必要とする点、「反期待」を示す点で共通し、「が（けれど）」と「ものの」は、必ずしも条件づけを必要とせず、対立的・並列的事柄を適宜表せる点、補足や、順当な展開を否定する事態を示す点で共通している。「ても」は条件づけがない場合にも対立的事柄を表すことがあるが、並列の機能はない。

[キーワード] 条件づけ 対比（対立・並列） 展開の否定 補足

1. はじめに

日本語の逆接の接続助詞は数が多く、『日本語教育事典』に記述のあるものだけでも17種類を数える^{注1}。これを確定条件、仮定条件に大きく二分すると、確定条件を表すものは次の10種である^{注2}。

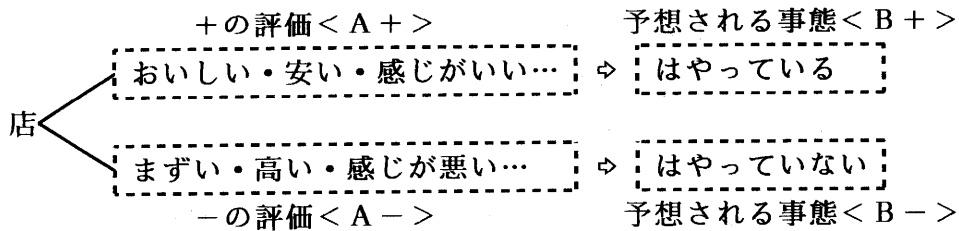
が、けれども（けれど・けども・けど）、のに、ものの、ても（でも）、
ながら、つつ、ものを、くせに、て（用法の一部）

個々の助詞については、意味・用法に関する詳細な研究がされており、二、三の助詞の比較検討もされているが、これらを大きくまとめて用法の違いを総合的にとらえる点では、まだ研究の余地があると思われる。ここでは、個別的な諸研究を参考にしつつ、逆接確定条件を表す接続助詞の代表的なものについて、用法の一部を比較し整理することを試みたい。「が」と「けれども（けれど・けども・けど）」は意味・用法がほぼ重なるので「が」に含めて考え、「が・のに・ものの・ても・ながら」を取り上げる。整理に当たっては、条件づけ^{注3}と対比（対立・並列）を中心に考え、モダリティー制限と発話意図につ

いては簡単に比較するにとどめる。

2. 条件づけと対比

例えば、ある店について良い点と悪い点を対比させてみる。良い点には「おいしい・安い・感じがいい・駅から近い」などが考えられ、これとは反対の「まずい・高い・感じが悪い・駅から遠い」などが悪い点として挙げられる。また、「おいしい」「まずい」等を条件とした場合、どのような事態が予測されるかを考えると、「おいしい・安い…なら、はやっているはずだ」「まずい・高い…なら、はやっていないはずだ」という予想が一般的に成り立つ。これを簡単に図示すると、次のようになる。



この例をもとに、AとBの事柄、あるいはAの事柄どうしを逆接の接続助詞でつないで、それぞれの違いを考えたい。

2-1 条件づけ

まず、AとBの組み合わせ、つまりAという条件から予想される事態Bとは相反する事態が展開する場合の文を作ると、それぞれ次のようになる。

あの店は おいしいが(けれど)、はやっていない。

おいしいのに、はやっていない。

おいしいものの、はやっていない。

おいしくても、はやっていない。

×おいしいながら、はやっていない。(×印は非文。以下同じ)

「ながら」は、形容詞に接続することで不自然な感じを与える^{註4}と考えられるが、次のような形に変えると自然な文として成立し得る。

あの店は おいしい店(であり)ながら、はやっていない。

<A+>と<B->、<A->と<B+>の組み合わせではどの助詞も文を作ることができ、これらの助詞に共通の用法として、「後件が、前件の内容から予想されるのとは反対の展開であることを示す」という用法があることがわかる。これは、前件・後件という二つの事柄を、予想とその反対の事態という関係で条件づけをする用法である^{注5}。助詞の違いによるそれぞれの文の意味の違いは別項で検討する。

2-2 対比・①対立的事柄

次に、Aグループの+と-の評価を対立させてつないでみる。

あの店は おいしいが(けれど)、高い。

×おいしいのに、高い。

おいしいものの、高い。

△おいしくても、高い。

×おいしい店ながら、高い。

「が(けれど)」「ものの」は一つの事柄の+点と-点を対比させてつなぐことができるが、「のに」はそれができない。「おいしい」「高い」という+点と-点を「のに」で表現する場合は、

あの店は 料理はおいしいのに、値段が高い。

のように変える必要がある。「料理はおいしい」と「値段が高い」という二つの事柄に分けることで、表現の裏で条件づけが成り立つからである。この文は、予想……料理がおいしいなら(いい店で満足がいくだろう)

予想に反する事態……値段が高いので(いい店とはいえ不満が残る)という、条件とそれに相反する事態の表現(1-1の形)の変形になっていると思われる。「のに」には、「条件的判断」や逆の「原因・理由文」を裏に持たない、「二つの事態の肯否の食い違い」を表す用法があるといわれているが(前田1995)、一見「条件的判断」を持たないかのように見える文でも、上のような変形した条件づけがされていると考えることは可能ではないだろうか。「が(けれど)」「ものの」が対立的事柄を表すのに対し、「のに」は必ず条件づけをする接続助詞であると言ってよいだろう。

Aの+と-の組み合わせによって、「あの店はおいしいのに、感じが悪い」のように「のに」を使って不自然ではない場合もあるが、この場合も「おいし

いのだから、感じがよければもっといい」という期待が裏切られた事態になっていることが表されている。

「ても」が成り立つのは、後件（＝高い）を言いたいときに、「おいしい」という利点はあっても「高い」という難点があることに変わりはないことを意味する場合である。例えば次のような状況で使われる。

話し手1：「料理がおいしいから、あの店にしよう。」

話し手2：「いや、あの店はおいしくても高いよ。別の店にしよう。」

このように、「ても」は何らかの前提があって使われる助詞で、比重のかけ方は異なるが、対立的事柄を表せる。

「が（けれど）」「ものの」においても、主節（後件）に焦点がおかれているが、後件で下す判断に対し、別の面からの評価を補足説明する働きがあるのではないかと思われる（cf. 加藤1991、中里1996）。

「ながら」は、前件・後件で両立しないはずの事柄が両立することに対する違和感を表す助詞と考えられるので、「おいしい」「高い」のように、+と－で対立する評価であっても両立可能な事柄に対しては使うことができない。

対立する事柄の中で、「おいしい」「まずい」のように同一の判断基準で両極にある内容をつなげる文（「あの店はおいしいがまずい」など）は、普通の文脈では成り立たないが、次のように否定形にすると文になるものがある。^{注6}

あの店は おいしくないが （けれど）、まずくもない。

×おいしくないのに、まずくもない。

おいしくないものの、まずくもない。

×おいしくなくても、まずくもない。

×おいしくない店ながら、まずい店でもない。

松本（1989）によると、「が」は、「両極端なものの否定の形を対立させることによって、その範囲の中間部分を表して」おり、「普通とか人並みという意味」であるという。「のに」「ても」「ながら」はいずれもこのような対立のさせ方はできないが、「ものの」は文として成り立つ。「ものの」の場合は「普通とか人並み」の意味を表すというよりは、先に触れたように「まずくない」という評価を出す前に、別の面からの評価もあることを付け加える前置きや補足の働きをしているのではないかと思われる。

同じく「おいしい」「まずい」を使って次のような文にすると、各助詞で文が成り立つが、それぞれの内容に違いが出てくる。

おいしい料理も あるが(けれど)、まずい料理もある。
あるのに、
あるものの、
(が) あっても、
を 出しながら、まずい料理も出す。

「おいしい料理」と「まずい料理」を入れ替えても文になるのは、「が(けれど)」「ものの」「ても」である。「のに」は入れ替えても不満・遺憾の意味合いが出てしまい、文の内容と矛盾してしまう。「ながら」も「のに」と同様で、否定的な意味合いが文の内容に合わなくなる。「おいしい料理」と「まずい料理」を対比させているのは「が(けれど)」「ものの」「ても」で、「のに」「ながら」は「おいしい料理があるならすべてそうであってほしい」という期待に反して「まずい料理もある」という事実²⁷に不本意である気持ちが現れた文となる。

2-3 対比・②並列的事柄

今度は、Aの+あるいは-同士をつないでみる。

あの店は おいしいが(けれど)、安い。
おいしいのに、安い。
おいしいものの、安い。
おいしくても、安い。
おいしい店(であり)ながら、安い。

「あの店はおいしくて安い」のように順接の助詞でつなげるべきものを、これらの助詞でつないだ場合は、裏に「おいしいなら高いはずだ」という予想を持ち、それに相反する事態を示す条件づけが成されていると考えてよいだろう。「が(けれど)」は並列・累加を表す働きもあるが(森田1989、松本1989)、松本(1989)で分析されている²⁷ように、「前件と後件の間には段階(すなわち対立)がある」ので、「おいしい」「安い」のように二者の間に段階が想定できない場合は、並列にならない。例えば、「あの店はおいしくて、駅からも

近い」という例を「おいしいが（けれど）、駅からも近い」と言い換えられない、つまり+評価の重ねができないことは、単純な並列にならないことを示している。並列を示すのは次のような場合である。

あの店も おいしいが（けれど）、この店もおいしい。

×おいしいのに、この店もおいしい。^{注8}

おいしいものの、この店もおいしい。

×おいしくても、この店もおいしい。

×おいしい店ながら、この店もおいしい。

「ながら」は前件・後件で主語が一致しないので非文になるとも考えられるが、例えば「?彼女はピアノも得意（であり）ながら、ギターも上手だ」のような例を見ても、やや不自然な文になる。「ながら」は同時進行を表す用法があるが、その場合は動作性の動詞で表される（森田1989）。

「のに」「ても」は並列できないが、「が（けれど）」「ものの」の場合は、二つの並列的な事柄をつなぐことができる。

3. 時間的な展開

1の例だけでは、前件と後件の事柄に時間的な展開が見られる場合の考察ができない。そこで、次の二例を考えてみたい。

1) やっと日本に 着いたが（けれど）、右も左もわからなかった。^{注9}

×着いたのに、

着いたものの、

△着いても、

×着きながら、

2) いったん仕事を やめたが（けれど）、すぐまた復帰した。

やめたのに、

やめたものの、

やめても、

やめながら、すぐまた復帰した。

後件が否定的な事柄と肯定的な事柄の二つの場合を例に挙げてみた。1)では「のに」「ながら」が不自然になるが、ここには「日本に着いたなら、当然

右も左もわかる（土地慣れしている）だろう」という予想は成り立たないので、どちらも非文になる。「が（けれど）」「ものの」は、自然な文となるが、「やっと日本に着いた」という事態からそのまま順調な展開になるわけではなくそれを否定する事柄を示している。「ても」は、前件にかかわらず後件の事態は変わらないこと、「やっと日本に着いたところまでにはいいが、右も左もわからないという困った状況はある」ことを示している。

2) では全ての助詞が文として成立するが、「のに」「ながら」は、「いったん仕事をやめたなら、そのままやめているはずなのに、そうではない」ことへの意外感が示されている。「が（けれど）」「ものの」は、意外感に伴わずに、前件から予想される順当な展開とは異なる方向に進んだことを示している。「ても」は先と同様、前件が後件をなんら妨げないことを示している。

この二例から、「が（けれど）」「ものの」には、順当な展開を否定する事態を後件に示す用法があると言える。

4. モダリティー制限

主節のモダリティー制限に関しては、「のに」と「が・けれども」「ても」の比較などから既に研究されているので、それをもとに、ここで取り上げる他の助詞と合わせて簡単に検討したい。比較に当たっては、前田（1995）の制限事項をもとにする。（ただし用例は筆者が考えた。「ながら」に前件・後件で主語一致の制限があるので、それに合わせた文にする。）

(1) 命令・依頼などの働きかけ

むだだと分かってい（る） {が（けれど）／×のに／？ものの^{註10}／ても／×ながら}、挑戦しなさい。

(2) 意思・希望などの表出

むだだと分かってい（る） {が（けれど）／×のに／ものの／ても／×ながら}、挑戦したい。

(3) 「だろう」「う・よう」による推量

むだだと分かってい（る） {が（けれど）／×のに／ものの／ても／ながら}、挑戦するだろう。

(4) 疑問文－①純粋な疑問文

むだだと分かってい（る） {が（けれど）／×のに／？ものの／ても／ながら}、挑戦しますか？

この文が純粋な疑問ではなく、反語・不信感・自問納得等を意味する場合は、「のに」も成り立つが、「ものの」は「ものを」の形になる方が自然である。

疑問文-②「のだ」による疑問文

むだだと分かってい(る) {が(けれど) /のに /?ものの /ても /ながら}、挑戦するのですか?

(5) 禁止

むだだと分かってい(る) {×が(けれど) /のに /×ものの /×ても /ながら} 挑戦するな

(1) ~ (4) ①まではすべて「実現していない事態、あるいは実現しているかどうか不明な事態」を表しており(前田1995)、すべての場合に非文になる「のに」は、前件・後件とも事実的な事柄でなければならないという制約があると言われる。他の助詞について見ると、「が(けれど)」「ても」は

(5) 以外はすべて文になるので、「事実的」という制約は必要ない。「ものの」は、相手に働き掛けたり、意向を聞いたりする場合には不自然な文になることから、自分で捕らえた事実、推測した事柄に使う助詞であると言える。

「ながら」は「~ていながら」の形を取る場合は「批判・嫌悪・困惑などの否定的な意味」を表す(江田1985)ため、(1)(2)のような場合には使えなくなると考えられる。「ものの」「ながら」の制約は、前・後件が事実的かどうかによるのではなく、助詞の意味に基づくものである。

金(1991)では、「が」構文のほうが「のに」構文より従属節の従属度が低く独立性が高いと述べられているが、従属度について上の例から考えてみよう。例えば(2)では「が(けれど)」「ものの」「ても」が可能だが、これらは「むだだとわかっている、しかしそれはそれとして」という、従属節の切り離しが考えられる。反対に(5)では

[むだだと分かってい(る) {のに /ながら} 挑戦する] な

のように、条件付け・同一主体の矛盾する状態を表している点で、前件・後件が密接に結び付いている「のに」「ながら」の場合に成り立っている。本稿2-2の最後の例で、前件後件を入れ替えて文が作れるのは「が(けれど)」「ものの」「ても」であったこと、2-3で「が(けれど)」「ものの」が並列的な事柄を表せたこと(同じく前件後件を入れ替えて文が作れる)を考え合わせると、「が(けれど)」「ものの」は従属節の従属度が低く、「ても」は

それに次ぎ、「のに」「ながら」は条件づけ・主語の一致という点で他の助詞より従属節の従属度が高いと言ってよいだろう。

5. 発話意図

今尾（1994）によると、「のに」は条件・帰結の論理的関係に反する事実を述べ、意外感、不満、非難、感嘆など話者の「反期待」を表し、「ても」は条件・帰結の論理的関係を否定する「反論」を表すという。この点から他の助詞を考えてみよう。

「ながら」は「のに」に近い意味を表す。例えば「自分で言い出したのに、もう忘れてる」という文を、相手を非難する意味のまま言い換えられるのは「ながら」だけである。（「自分で言い出しておきながら」という形にすると、さらにその感じが伝わる。）「したたか酔いながら、決して姿勢を崩さない」のように感嘆する意味も表せることから、「のに」と同様、+と-どちらの意味でも「反期待」の意味を持つと言える。「が（けれど）」「ものの」は、意外感などの「反期待」を表すこともあるが、「のに」と違い、常に「反期待」を表すというわけではない。先述の例の「おいしい料理もあるが／ものの、まずい料理もある」では、「のに」「ながら」のような非難や遺憾の気持ちは、それ程強くはない。「が（けれど）」「ものの」は、より客観的に物事を叙述できる助詞である（cf. 中里1996）。後件が順当な展開ではないことを意外感を持って示すことも、また淡々と述べることもでき、別の評価や状況を付け加える補足説明が時には言い訳になる場合もある。発話意図はその文脈によって異なってくると言える。。

6. まとめ

以上の比較の結果を簡単に示すと、次のようになる。

	が・けれど	のに	ものの	ても	ながら
条件づけ	○	○	○	○	○
対比（対立）	○	×	○	○	×
対比（並列）	○	×	○	×	×
補足	○	×	○	×	×
順当な展開の否定	○	×	○	×	×
従属度	低	高	低	低	高

条件づけに関する詳しい研究は既にされているので、ここでは触れなかった。そのため、「のに」「ても」「ながら」の用法の分類が簡単になってしまったことが反省される。逆接の接続助詞については、確定条件・仮定条件とも合わせて、全体的な意味・用法の整理が必要ではないかと思われる。今回はその一部について基礎的な整理を試みた。連体修飾節になる場合や、前件の主語を示す助詞との関連など、他にも比較・検討すべき事項はあり、それらについても今後考えていきたい。

注

- 1 第4章語法各説・V助詞類各説に挙げてある助詞を数えたもの。本文に挙げた確定条件以外のものは「に（用法の一部）／とも／ども／たって（だつて）／とて（つて）／ところが／ところで」である。
- 2 「ても」は仮定条件・確定条件二つの用法がある。
- 3 「条件づけ」は仁田（1987）で使われている意味に従う。仁田氏は、ノニ・テモは「言い切り節に描かれた出来事・事柄」を「期待・予想される方向でない展開のものとして差し出している条件付け」であるとして、「逆条件づけ」と呼んでいる。
- 4 「狭いながらも楽しい我が家」「小さいながら力のある選手」のように、「ながら」が形容詞に接続しないわけではないが、辞典、日本語教科書、研究書にある例のほとんどが、動詞・名詞・形容動詞の語幹に接続する例であり、一般に形容詞に接続する例は非常に少ないと思われる。
- 5 今尾（1994）では「ても」条件・帰結の論理的関係自体の否定を表すとされているが、ここでは条件づけがどちらも成されることだけを考える。
- 6 松本（1989）の「矛盾的対比」の項を参考にしている。
- 7 松本（1989）では「並列的対比」と分類されている。
- 8 「のに」が成り立つとしたら、「この町においしい店は一件しかないはずだ」という前提があり、「あの店がおいしいなら、他においしい店はないはずだ」という予想とそれに反して「この店もおいしい（ので、他においしい店があった）」という矛盾する事態を示すような場合である。
- 9 『自然な日本語Ⅱ』（桜井晴美・凡人社）の「ものの」の例による。原文の「日本には」の「は」は省いた。

- 10 「むだだと分かっているものの、それで納得するのなら、挑戦しなさい」のように、前・後件の間に何かつなぎになる語句が想定できる場合は不自然さが減る。

参 考 文 献

- 今尾ゆき子(1994)「条件表現各論—ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ— 談話語用論からの考察—」『日本語学』VOL13 8月号
- 江田すみれ(1985)「逆接の『ながら』の意味と用法について」『ILT News』78 (早稲田大学語学研究所)
- 加藤薫 (1991)「『逆接』の接続詞についての一考察—『しかし』系の接続詞を中心として—」『国語学研究と資料』15
- 金勝漢 (1991)「接続助詞『が』『のに』の意味・用法をめぐって」『上智大学国文学論集』24
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞—用法と実例』(秀英出版)
- 佐竹久仁子(1986)「『逆接』の接続詞の意味と用法」『論集日本語研究(一)現代編』(宮地裕編著・明治書院)
- 戸村佳代(1989)「日本語における二つのタイプの譲歩文—『ノニ』と『テモ』—」『文芸言語研究 言語篇』15 (筑波大学)
- 中里理子(1996)「『ものの』の意味・用法について」『東京大学留学生センター紀要』6
- 西原鈴子(1985)「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』56 7月号
- 仁田義雄(1987)「条件づけとその周辺」『日本語学』6 9月号
- 日本語教育学会(1982)『日本語教育事典』(大修館書店)
- 前田直子(1995)「逆接を表す『~のに』の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』5
- 松本哲洋(1989)「接続助詞『が』の用法に関する一考察」『麗澤大学紀要』49
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』(大修館書店)
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』(角川書店)

(埼玉短期大学 講師)